琉球大学学術リポジトリ

沖縄・先島諸島で暮らすフィリピン人女性たちの生活世界：ネットワーク，リーダーシップと次世代継承を中心に

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja): フィリピン, 島嶼, ネットワーク, リーダーシップ, 第二世代
	キーワード (En):
	作成者: 野入, 直美, Noiri, Naomi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010093

移民研究 第 11 号　2016　7-36

沖縄・先島諸島で暮らすフィリピン人女性たちの生活世界
—ネットワーク，リーダーシップと次世代継承を中心に—

野 入 直 美

Ⅰ．島嶼と女性の移動
Ⅱ．石垣におけるフィリピン・ネットワークとリーダーシップ
Ⅲ．宮古におけるフィリピン・ネットワークとリーダーシップ
Ⅳ．次世代継承—リーダーの子どもたちを中心に
Ⅴ．結びに代えて—島嶼におけるフィリピン・ネットワークと次世代継承

キーワード：フィリピン，島嶼，ネットワーク，リーダーシップ，第二世代

Ⅰ．島嶼と女性の移動

1．研究の目的 —「島嶼散住型」の析出に向けて

これまでの在日フィリピン人研究をフィールドの特徴によって大別すると，「大都市集住型」と「農村散住型」とに分かたれるように思われる。前者の例としては高畑幸が，名古屋市中区の繁華街である栄東地区をフィールドとして，異種混交化の地域性と地域共生事業について分析している（高畑 2012）。そこで高畑は，「繁華街にとっての『善きこと』は賑わいであり，日本人・外国人を含めてそこに人がいること」，その街の賑わいをよしとする枠組みにおいては「外国人住民を一方的に排除する論理は成り立ちにくい」（前掲書: 513）と述べている。一方で，自治会が住民をカバーする公営住宅などとは異なり，繁華街では地域の多文化共生が基本的に「任意」であり，カバーされない層や流入を続ける新参者たちを含めて，「外国人住民問題が地域の治安問題の延長線上にある」ことも指摘されている。そこでは，当事者どうしの相互扶助とともに，外国人支援団体や専門家が重要な役割をはたしてきた。「大都市集住型」の特徴として，多数の，多様なフィリピン人が他の外国人とともに集住し流動していること，共生と治安の文脈が地続きであること，そして問題状況も深刻であるが，専門的な支援のしくみと社会関係資本が蓄積されていることが挙げられる。

農村をフィールドとした研究には，1985 年に山形県で始まった行政の仲介婚による結婚移民を扱うものがある。武田里子は，農山村地域の深刻な結婚難と「外国人花嫁」の側にある経済的な動機に言及し，「社会の構造変化によって生じた社会問題としてとらえる必要がある」と述べている（武田 2006 : 593）。行政と業者による仲介婚の問題も指摘されてきた（佐竹・ダアノイ 2006）。近年の動向としては，2011 年の東日本大震災によって，

名称未設定-1　7　　2016/05/11　1:02:32

地域社会において不可視の存在であったフィリピン人女性たちの存在が明るみになり，支援と相互扶助が本格化してきたという指摘がある（嘉本 2014）。「農村散住型」の特徴としては，仲介婚，深刻な孤立，そして東日本大震災以降の状況の変化が挙げられるだろう。

本研究の目的は，「都市集住型」と「農村散住型」という対照的な二類型とは異なるもうひとつのフィリピン人女性の移動・定住類型として，「島嶼散住型」という仮説的な枠組みを，沖縄の先島地域の事例に基づいて析出することである。

島への渡航と定住は，その島の規模や架橋の有無によっても異なるが，通常は明確な境界線で囲まれた生活圏内における暮らしに入ることを意味する。そこには移動の制限と地理的な孤立，相対的な経済的沈滞が常態としてあり，社会関係や人的資源も限られている。狭い島の中で，フィリピン人女性どうし，さらにフィリピン人女性と地元の人びととの間に，「顔の見える関係」，あるいは「顔を突き合わさざるを得ない関係」があり，さまざまな相互行為が展開されている。島嶼には，大都会のような流動性，多様性，地域における共生や治安，外国人支援の文脈は存在しないか，あったとしてもきわめて限定されている。一方で，石垣島に 50 人程度，宮古島とその周辺離島に 80 人程度というフィリピン人の規模の小ささからすれば「散住」であるが，島の中には緊密な互助，巧みに分かち持たれるリーダーシップ，複数の集いからなる緩やかなフィリピン・ネットワークが存在する。それは大都市とも農村とも異なる，「島嶼散住型」ともいうべきものではないかと考えられる。

本稿では，とくにフィリピン人女性たちのネットワーク，リーダーシップと次世代継承を中心に，沖縄・先島地域で暮らすフィリピン人女性たちの生活世界をとらえることを試みる。あまたの女性の移動研究において，「島」に着目した分析はまだ行われていない。本研究は，「島嶼と女性の移動」[1] という新たな領域をひらくために，まず沖縄の先島地域において事例研究に着手するものである。

2. 調査の対象

本研究では，2013 年と 2014 年の夏季を中心に，アンケート調査，インタビュー調査，教会の行事やフィリピン人女性たちの集いへの参加という形での参与観察によってデータを収集した。調査方法の詳細は本誌特集の序章を参照されたい。

石垣と宮古における調査対象者については，本誌の高畑論文が詳細な一覧表を掲載している。以下の一覧は，その一部を抜粋・改編したものである（表 1，表 2）。

Ⅱ．石垣におけるフィリピン・ネットワークとリーダーシップ

1. 石垣調査結果の概要

ここでは，アンケート調査で得られたデータを中心に，石垣島に在住するフィリピン人

名称未設定-1　8　　2016/05/11　1:02:33

表１　石垣島調査対象者一覧

番号	カテゴリ	生年	来日年	結婚年	現住地	夫職	本人現職
I-1＊	フィリピン人女性	1966	1988	1992		水産自営	家業手伝い
I-2＊	〃	1967	1991	1994	市街地	死別	調理
I-3＊	〃	1970?	1994	1993		専門職	
I-4	〃	1966	1989	1999	市街地	離別	介護
I-5	〃	1974	1997	2000	市街地	民間企業	無職
I-6	〃	1973	1989	1995			？
I-7	〃	1977	1994	1996	市街地	離別	接客
I-8	〃	1974	1997	2000	市街地	ホテル勤務	無職
I-9	〃	1963	1996	2001	郊外	労務	
I-10	第二世代	1994	日本生				大学生
I-11＊	I-3配偶者	1960		1993			専門職
I-12	配偶者						
I-13＊	支援者						小学校管理職
I-14	関係者						

注：＊は本稿でとりあげる対象者である。

表２　宮古対象者一覧

番号	カテゴリ	生年	来日年	結婚年	現住地	夫職	本人現職
M-1＊	フィリピン人女性	1967	1993	1994	A島	農業	介護施設
M-2	〃	1969	1997	2004？	市街地	労務	レストラン
M-3	〃	1956	1997	1997	A島	農業	介護施設
M-4	〃	1965	1988	1994	市街地	元団体職員	介護施設
M-5＊	〃	1962	2002		郊外	農業	農業，英会話教員
M-6＊	〃	1975	2001	2000	郊外	船員	レストラン
M-7	〃	1962	1990	1991?	郊外	農業	ホテル清掃
M-8	〃	1954	1971	1992	A島	水産	農業
M-9	〃	1961	1984	1988	市街地	労務	食品工場
M-10	〃	1971	2002	2002	A島	？	ホテル清掃
M-11	〃	1971	1991	1994	市街地	整備士	介護施設
M-12	〃	1965	1990	1997	市街地	？	ホテル清掃
M-13	第二世代	1997	日本生		B島		高校生
M-14	〃	1992	日本生		沖縄本島		大学生
M-15＊	〃（M-1長女）	1995	日本生		沖縄本島		大学生
M-16＊	〃	1993	日本生		沖縄本島		大学生
M-17＊	（M-6長男）	1995	2001		関西圏		専門学校生
M-17	支援者	1947					
M-18	〃						
M-19	〃						
M-20	〃						

注：「市街地」「郊外」は宮古島の市街地と郊外を指す。「宮古」は宮古島およびその周辺離島からなる宮古圏域を指す。

女性の概要を整理し，彼女たちのネットワークと，それを支えるリーダーシップの構造を明らかにする。

石垣島に在住するフィリピン人は圧倒的多数が女性である。フィリピン人の外国人登録者数は 2003 年の 65 人がピークで，近年は 50 人前後で推移している。実際には戦前からのパインアップル栽培と缶詰加工産業にルーツを持つ台湾系住民約 400 世帯が最大のエスニック・グループであるが，大多数は日本国籍を取得しているため，フィリピン人が外国

名称未設定-1　9　　2016/05/11　1:02:33

人登録者数上では最多である。カトリック教会の英語ミサには，フィリピン人以外の外国人は参加していない。

アンケート回答者の年齢構成は，40 代をピークにするものとなっている。回答者 16 名のうち 40 代が 10 名であり，50 代と 30 代それぞれ 2 名，20 代は 1 名であった。

毎日曜日の午前に行われるカトリック教会のミサには，5，6 人から 10 数人が出席している。このミサは，別の日時に行われている英語ミサと並んで，フィリピン人女性たちが定期的に集う機会のうち，最も規模の大きいものである。

フィリピンから渡日した時期については，1990 年代に初めて来日した人が 6 名，80 年代が 5 名，2000 年以降が 1 名であった。渡日の経緯としては，興行ビザで沖縄県外へまず渡航し，同ビザの関係により半年でいったんフィリピンへ戻り，日本ーフィリピンの複数回の往還を経て，知り合った石垣島の地元男性と結婚し，石垣へ結婚移民してくるというケースが多い。沖縄県外を経由せずに石垣島に直行してきた人のうち，1 名はフィリピンで配偶者となる男性と出会っており，3 名は，石垣島にかつてあったいわゆるフィリピンパブで働くために渡航してきていた。2005 年以降は，興行ビザによる渡航は絶えている。

回答者のうちシングルマザーは 3 名で，その背景は離婚 2 名，死別 1 であった。ほとんどの女性たちは，小学生から大学生くらいの年齢の子どもを育てながら，パート就労についていた。

石垣島には，フィリピン人女性たちが集まっている職場というものは存在しない。職種としては，介護ヘルパー（2 級取得 2 名），調理，接客，ホテル清掃（ベッドメーキング），ビル管理，家業の自営業経営（海産物養殖）などがあった。

居住地について，石垣市街地（登野城，大川，石垣，新川から成る四ケ字）に，16 名のうち 14 名が居住していた。その集中度（88%）は，石垣島の総人口の四ケ字への集中（62%）を上回る。

配偶者は，1 名を除いて石垣を地元とする男性であった。配偶者の職種としては，ホテル・民間企業勤務，自営，専門職があった。

2. 石垣フィリピン・ネットワークの構成要素

石垣島におけるフィリピン人女性たちの集まりには，カトリック教会の中で役割分担をするひとつの「組」のようなフォーマルな集団もあるが，親密性によって集うインフォーマルな集団もある。フィリピン人女性は，仕事や家庭の都合，その集いに出席するメンバーとの親しさによって，参加の度合いを選ぶことができる。そのような緩やかさを持つ複数の集いの総体を，ここではネットワーク[2)]と呼ぶことにする。

石垣のフィリピン・ネットワークは，いくつかの主要な集まりによって構成されている。

名称未設定-1　10　　2016/05/11　1:02:33

主な集まりは，1）カイビガン☆，2）英語ミサ☆，3）教会に隣接するカトリック系の私立小学校，A 校の保護者☆★，4）ロザリオ★，5）模合★，6）興行の元同僚★である。ここで☆は，フィリピン人女性以外の他者から認知され，周囲と社会関係を持つフォーマル・グループ，★はそのような認知や関係性を持たないインフォーマル・グループを意味する。

1）カイビガン☆

カイビガンは，2003 年からカトリック石垣教会に設置された「組」であり，地元信者による他の組と同様に「典礼・清掃当番」を担当する，フィリピン人女性たちの当番組織である。「典礼当番」とは，月に 1 回，日曜日のミサを準備し，ミサにおいては一名が前に進み出て聖書を朗読し，モーニングサービス（ミサ後の集い）のための軽食を準備してくることである。「清掃当番」では，月に 1 回，組のメンバーが集まって教会の清掃をする。

「カイビガン」とは，タガログ語で「友達」を意味し，海外在住のフィリピン人のグループ名によく用いられるという。石垣島のカイビガンが作られたのは，当時，石垣島に赴任し、フィリピン人信者をサポートしていたひとりのシスターが，教会の中でフィリピン人のグループを作り，役割を持たせるのはどうかと発案したことによる。そのシスターは、フィリピン人の父親と沖縄女性の母親をもち、タガログと日本語の両方を話すことができた。彼女は、フィリピン人女性たちが教会に来て協力する機会を増やすことが有効な支援になると考えた。一方で，カトリック教会の側にも，フィリピン人女性たちを信仰共同体の中に巻き込みたいというニーズがあった。地元の信者たちは高齢化してきており，40 代を中心とし，カトリック信仰の篤いフィリピン人女性たちに，教会の担い手としての期待が寄せられていたという。とくに教会に隣接する A 小学校で教員を務め、フィリピン人女性たちと教師 ― 保護者としても関わってきた地元の女性信者が，神父や教会の役職者に働きかけた。その結果，「カイビガン」は教会における正式な「組」として発足した。

フィリピン人女性たちは，周囲の期待以上の働きをしてきた。典礼当番で聖書を朗読する女性は，自分の子どもから日本語の特訓を受けて本番に挑んだ。モーニングサービスでは，カイビガン提供のフィリピン料理は地元信者たちにも好評で，それがフィリピン人女性たちの自己肯定感にもつながっているという。

カイビガンは，2013 年 11 月に開催されたカトリック石垣教会創立 60 周年記念行事において，卓越した存在感を示した。彼女たちはミサで聖歌を捧げ，祝賀会では地元信者とともに石垣島の伝統舞踊を踊り，衣装を変えて彼女たちだけでフィリピンのバンブーダンスを踊り，さらに「ビーナス・シスターズ」として華麗なインドの舞踊を披露し，食事会では，揃いのポロシャツで飲み物のコーナーを担当した。舞台の上から裏方にいたるまで，フィリピン人女性たちの貢献が行事を支えていることが見て取れた。

名称未設定-1　11　　2016/05/11　1:02:33

2）英語ミサ☆

英語ミサは，2000 年からカトリック教会においておおよそ月 1 回，平日の夕刻などに開催されており，参加者は全員がフィリピン人女性である。通常，数人から十数人が集っている。

発案者は地元の女性信者である I-13 で，A 校教員としてフィリピン人の母親たちと関わり，さらに自身の娘が国際結婚で渡米しているという背景もあった。I-13 は，娘を訪ねて数か月，アメリカ滞在をする中で英語のミサに出席していたのが，遠方の日本人街に赴き，日本語のミサに久しぶりに出席したところ，大きな感動を覚え，母国語でのミサの重要性を痛感したという。I-13 は帰国後，石垣の教会で英語ミサを提議し，実現に至った。

英語ミサが教会で開催されていることは教会の行事予定表にも記されており，地元信者の人びとから認知されている。

3）A 校保護者のつながり☆★

教会に隣接する私立小学校，A 校の保護者としてのつながりには，保護者会活動などのフォーマルな関係と，送迎時のママ友会話などのインフォーマルな関係が含まれている。そういう場で，英語ミサやロザリオの日程が調整されることもある。

A 校は，学校法人カトリック学園が運営する小規模な私立学校で，生徒の親は隣接するカトリック教会の信者であることが多い。隣接する教会の助祭が学校の校長を，教会の信徒副代表が教頭を務めており，教会とは立地的にも社会関係的にも地続きである。2013 年 11 月の調査時点では，全校生徒 72 人のうち 6 人がフィリピン第二世代の子どもであった。ここでフィリピン人女性たちが保護者としてかかわった教員が，教会の主要メンバーとして「巻き込み」の中心になり，それがカイビガンや英語ミサにもつながっている。

4）ロザリオ★

ロザリオは 2003 年から始まったもので，月に一度，マリア像を囲んで数珠をたぐり，祈りをささげるマリア信仰の家庭集会である（本誌松田論文を参照）。各信者宅でマリア像を輪番制で預かって祀り、その家で集いがもたれるところに特徴がある。リーダーのフィリピン人女性，I-3 が発案し，前述したフィリピンルーツのシスターが支援して行われることになった。いくらかの女性たちにとっては，フィリピンでも経験した慣習である。

ミサや英語ミサには仕事や家庭の事情で出席できない女性も，ロザリオには顔を見せることがある。母親に伴われて，小さな子どもたちも参加する。祈りの集いの後に，フィリピン料理を楽しむ持ち寄りの食事会があり，タガログ語やビサヤ語でのにぎやかな会話の

名称未設定-1　12　　2016/05/11　1:02:33

ひとときがある。

5）模合（もあい）★

模合は，沖縄にもフィリピンにもある互助融資と親睦の集いである。一般的には，友人や同僚，元同級生などが月に一度，5 千円や 1 万円などの定額を持ち寄って持ち回りで 1 名か 2 名に融資し，飲食と歓談を楽しむ。フィリピン人女性は，模合でフィリピンへの里帰り旅費を工面したりする。

6）興行の元同僚★

興行の元同僚は, 1990 年代に同じプロダクションで働いていた仲間どうしで, 一緒にフィリピンと日本を往還し, 同じ店で働き, 寝食を共にしてきた人びとである。いくらかのフィリピン人女性は，この関係性の中で最も親しい，頼りになる「アテ（注：姉さんを意味する。血縁は含意しない）」を持っている。

一方で，興行経験の中でフィリピン人女性の同僚と衝突した人もいる。その女性はいっとき，元同僚たちと顔をあわせたくなくて，ミサに来なくなっていた。そのときロザリオは，彼女が信仰の集いに参加し，他のフィリピン人女性たちと交わり続ける機会となった。彼女の家でロザリオをするときには，リーダーの女性が配慮し，元同僚の女性たちが来ないようにすることもあったという。

3. 石垣フィリピン・ネットワークの構造

石垣フィリピン・ネットワークの構造的特徴は，第一に，フォーマル・グループとインフォーマル・グループが絶妙なバランスをもって併存していることである。カイビガンというフォーマル・グループがあることで，フィリピン人女性たちは教会の中で可視化され，期待に応えて役割を担うという相互行為を継続的に営んでいる。一方で, 複数のインフォーマルな集いがあり，ひとりひとりが仕事や家庭の事情，人間関係に応じて参加の度合いを変えることができる。そのようなインフォーマル・グループとフォーマル・グループが組み合わさって，融通の利くネットワークが編成されているのである。

このネットワークの展開は，当事者どうしの相互行為だけでなく，地元の人びと，とくにカトリック教会の地元信者たちとの関係性の中で培われてきた。フィリピン人女性たちは，地元信者による「巻き込み」に積極的に応え，教会運営の担い手となってきている。

ただし，フィリピン人女性たちは，たんに教会に「巻き込まれた」わけではない。彼女たちの多くは，故郷にいた頃からカトリック教会と深くかかわっており，日曜日のミサ以外にも頻繁に祈りに赴いたり，募金集めなどの活動に参加したりした人たちもいる。ロザ

名称未設定-1　13　　2016/05/11　1:02:33

リオの経験者は，子ども時代，我が家にマリア像を迎えた日の誇らしさを覚えている。彼女たちは，そのようなフィリピンでの経験や文化を資源として，能動的なアクターとなってきたのである。教会に集うフィリピン人女性たちが，カトリック信仰に篤い活動的な信者であり，優れた文化的アクターであることは，地元信者によって認知されている。フィリピン人女性たちは，信仰共同体の「ゲスト」でも「要支援の外国人」でもないポジショナリティを，周囲との関係性に根ざしつつ，自ら獲得してきたといえるだろう。

一方で，カトリック教会を一歩，外に出ると，石垣島の地域社会におけるフィリピン人女性たちは，ほとんど不可視の存在である。彼女たちは，職場では中堅やベテランのパート職員であり，婦人会会員や公立学校の保護者としてもコミュニティに位置づいているが，フィリピン人としての可視性は低い。きわめて豊かで，機能的にも優れたエスニック・ネットワークは，しかし，教会の中だけでほぼ完結しているのである。このことは，石垣フィリピン・ネットワークの第二の特徴であるといえるだろう。この地域社会における不可視性という特徴は，宮古フィリピン・ネットワークと比べるとき，ひとつの相違点として浮かび上がってくる。

4. 石垣フィリピン・リーダーシップの構造

石垣フィリピン・ネットワークの背景には，自分の時間と労力を相当に費やしてそれを支えている数人の女性たちがいる。彼女たちは集いを発案し，仲間に呼びかけ，自宅を開放し，ときには一人で教会を清掃したりモーニングサービスの料理を作ったりもしながら，フィリピン人女性たちを緩やかに束ねている。

石垣島には，二人のフィリピン人女性リーダーがいる。I-1 は，1966 年に生まれ，地元で高校までを過ごし，フィリピンの名門大学に通うが，下のきょうだいの暮らしや学資を支えるために中退した。1988 年に興行ビザで初来日し，日本本土とフィリピンを複数回，往還した。1992 年に結婚し，石垣島へ移住した。まず夫にカトリック教会の場所を尋ね，連れてきてもらったという。仕事は，夫と一緒に海産物養殖の自営をしている。石垣島市街地から自動車で 1 時間余の郊外に在住し，地域の婦人会活動にも参加している。夫は，仕事の関係で英語を話すことができる。沖縄本島で娘二人が大学に，地元で息子が中学校に通っている。子どもたちは，小学生までは教会に隣接する A 校に通っていた。その当時は，この学校で英語教師のボランティアをしたこともある。彼女は英語とタガログ語，日本語を話す。教会では地元信者とともに「女性の会」に所属している。

I-1 が参加している集いは，1）カイビガン＊，2）英語ミサ＊，4）ロザリオ＊，5）模合，6）興行の元同僚である。＊は，その集いにおいて I-1 が中心的なアクターであることを示す。含まれていない 3）A 校保護者についても，子どもの卒業までは活動的な保護者であった。

名称未設定-1　14　　2016/05/11　1:02:33

I-1 は，石垣フィリピン・ネットワークをほぼ完全にカバーし，そのうち三つにおいてキーパーソンであり，複数のフィリピン人女性から，「アテ（姉さん）」という呼称をもって，信頼をこめて言及されている。

もう一人のリーダー，I-3 は I-1 よりも 6 歳ほど年下で，石垣島のフィリピン人女性の中で唯一，配偶者となる男性と，フィリピンで出会って結婚移住してきている。その男性は，学生時代，I-3 のアルバイト先に観光で来ていた常連客で，沖縄県外出身者だった。知り合った時は二人とも学生だったが，彼は専門職として働き始め，彼女も大学を卒業するのを待って結婚し，翌年，日本本土に来住した。数年を関西や沖縄本島ですごしたのち，夫の仕事で石垣島へ移住することになった。調査時は石垣市街地に在住し，パートで介護職に就いていた。ヘルパー 2 級の資格がある。夫が英語を話せるため，子どもが生まれるまでは，家庭言語はすべて英語であった。教会に隣接する A 校に次男が，公立中学校に長男が通っている。夫は，A 校の保護者会活動に積極的に関与している。I-3 は，ビサヤ語，英語と日本語を話す。教会では地元信者と共に「典礼行事部」に所属し，教会運営を担う評議員も務めている。

I-3 が参加している集いは，1）カイビガン＊，2）英語ミサ＊，3）A 校保護者＊，4）ロザリオ＊，5）模合である。興行経験がないだけで，それ以外は石垣フィリピン・ネットワークのほぼ全部をカバーしている。また I-3 は，フィリピン人の友人たちをこまめに助けている。移動手段のない友人をロザリオやミサに送迎し，元気のない友人の家を訪ね，子どもの洗礼にフィリピン人神父を沖縄本島から招きたい友人のために飛行機代を折半する。これらは本人が語ったのではなく，複数のフィリピン人女性たちの語りによって得られた情報である。

そして，I-1 と I-3 がやや苦手とする日本語の領域をカバーしている女性が，I-2 である。フィリピン人女性のことをよく知る I-13 は，「ここぞというときはこの人が出てくる」という。I-2 は，1967 年に生まれ，フィリピンの名門大学に通うが，家庭の事情で中退した。1994 年に興行ビザで初来日し，日本本土とフィリピンを複数回往還し，石垣島に来住した。夫は，石垣島の周辺離島にルーツを持つ男性で，その離島の祭祀において代々，重要な役割をはたしてきた家の長男であった。このため，I-2 自身もその離島の郷友会に所属し，息子たちもその祭祀に参加している。ミサと英語ミサに通うが，家庭では長男嫁として仏壇行事を担う。長女は沖縄本島で大学に通っている。姑の紹介で，その離島出身者が経営する店で調理の仕事をしている。

I-2 の日本語力は，二人のリーダーよりはるかに優れている。カイビガンの典礼当番で，フィリピン人信者の中で最初にミサで聖書朗読をしたのは I-2 であった。外国人の来客に通訳をするのも彼女である。二人のリーダーは，なまじ夫に英語力があるので，徹底した

名称未設定-1　15　　2016/05/11　1:02:33

日本語環境への適応を迫られた I-2 ほどの日本語力が身につかなかった。日本語力が必要となる場面では，I-2 の出番となる。

石垣フィリピン・リーダーシップの構造は，しばしば二人のリーダーが相当な負担を引き受けることで維持されつつも，二人以外のサポート・メンバーを有して，均衡のとれた構成となっている。

Ⅲ．宮古におけるフィリピン・ネットワークとリーダーシップ

1．宮古調査結果の概要

宮古には，およそ 70 人のフィリピン人女性が居住している。宮古には石垣島における台湾系住民のようなオールドカマーは存在せず，フィリピン人が実際にも外国人登録者数上でも最多のエスニック・グループである。アンケート回答者は 12 名で，40 代が最も多く 6 名，50 代は 4 名，30 代と 60 代が 1 名ずつであった。

調査協力者の居住地は，宮古島に 8 名が，宮古周辺のＡ島には 4 名が居住していた。石垣島において市街地への集中度が高かったのに対し，宮古島では郊外の農村エリアに居住している人たちもいた。

日曜日の教会のミサには，2 ～ 3 名のフィリピン人女性が出席している。この人数は，石垣島のミサの出席者よりもかなり少ない。後述するように，宮古のフィリピン人女性にとって，市街地にある教会よりも，郊外にある，フィリピン人シスターたちが居住している修道院のほうが，より重要な集合場所となっている。

渡航の時期は，1990 年代に初来日している人が 5 名，80 年代と 2000 年代が 3 名ずつで，70 年代が 1 名であった。この 70 年代の渡航者は，米軍統治時代に沖縄本島で興行経験がある。12 名のうち，興行ビザで初来日した人が 7 名である。石垣島との違いは，日本本土での興行を経由せずに，直接，宮古島に来島した人が多いことである。

一方で，興行を経験していない結婚移民は 5 名であった。うち 4 名は，先住しているフィリピン人女性による紹介で，地元男性と結婚している。行政や業者による仲介婚を経てきた対象者は，皆無であった。ただし，対象者以外に宮古在住で 1 名，業者の斡旋による結婚移民のフィリピン人女性がいるという。

シングルマザーは 3 名で，その背景は離別 2，死別 1 名であった。ほとんどの人びとは，石垣島と同様に，小学生から大学生くらいの年齢の子どもを育てており，パートで働いていた。

一方で，石垣島とは異なり，宮古島にはフィリピン人女性の集まる職場が複数ある。ひとつは高齢者の介護施設で，経営者の長男嫁がフィリピン人女性であることから機縁的にフィリピン人女性が集まり，5，6 名が働いている。ここには，ベトナムからの結婚移民

名称未設定-1　16　　2016/05/11　1:02:33

の女性たちもいる。もうひとつは，アメリカ人経営のステーキハウスで，ここには3，4名のフィリピン人女性が働いているという。この女性たちは，カトリック信仰にかかわる集いには顔を見せないので，調査において接点を持つことができなかった。さらに，何人かのフィリピン人女性たちがベッドメーキングの仕事をしている高級リゾートホテルが2軒ある。

フィリピン人女性の配偶者は，1名を除いて地元男性であった。内訳は，自営（農業3名・海産物養殖1名），退職（元団体勤務，労務など）である。

アンケート回答者12名のうち，9名はフィリピンで大学に通っていたことがあり，石垣島よりもやや高学歴である。高校を卒業した子どもたちは，沖縄本島や沖縄県外に進学している。

これらのフィリピン第二世代の若者たちにもインタビュー調査に協力してもらった。大学生3名は，同じ私立大学で，同じ英語専攻のある学科に所属しているのだが，その全員が，AO入試でフィリピンルーツをアピールしていた。一方で英語とフィリピンの言葉は，フィリピン在住経験，往還経験のある若者しか話すことができなかった。

2. 宮古フィリピン・ネットワークの構成要素

石垣島と同様に，宮古島のフィリピン人女性たちにも複数の集いがある。石垣島の集まりが2000年代に成立したのに対して，宮古島のそれは2010年代に始まっており，かなり新しい。石垣島ではフィリピンルーツのシスターが1998年に，宮古島ではフィリピン人のシスターが2012年に赴任してフィリピン人女性たちの組織化をすすめており，シスターの赴任の時期によって違いが生じていると思われる。

1）教会模合☆★

教会模合は，2013年1月から始まったもので，月に1度，通常は日曜日の夕刻，宮古島郊外にあるフィリピン人シスターたちが居住する修道院で開催される。まずシスターを中心に祈りの集いがあり，続いて簡単な食事をとりながら模合のお金が集められる。フィリピン人女性たちは，5,000円を出し合って持ち回りで融資し，そのうち500円を教会に寄付する。5～6人から14～15人が参加し，小学生くらいまでの子どもたちも数名，同席する。修道院の中庭では，妻を送迎してきた夫たちが数名，夕涼みをしながら終了を待っている。

石垣との違いは，修道院で行われること，シスターが主導する祈りの集いがあることと，集金の1割が教会に寄付されることである。互助と親睦の機能は共通するが，それに信仰の要素と教会への貢献が付加されている。しかしこの集いは，教会の地元信者には知られ

名称未設定-1　17　　2016/05/11　1:02:33

ていない。フォーマルな性質をいくらかは持ちつつ，基本的にはフィリピン人女性だけで完結する，インフォーマルな集いとなっている。

2）ロザリオ★

ロザリオは，2014 年 6 月から始まった。石垣島のそれと同様に，持ち回りでマリア像を囲む，家庭での信仰の集いが持たれている。石垣島のロザリオが月に 1 回であるのに対し，宮古のそれは週 1 回である。祈りの集いの後には食事会がある。

3）マブハイ・ダンスグループ★

マブハイ・ダンスグループは，フィリピンのダンスを踊る 14 ～ 15 名のグループである。「マブハイ」はタガログ語で「バンザイ」「やったね」というような意味だという。

2008 年に宮古島で司祭・神父が集う聖職者の会議が催された折に，リーダーの女性 M-5 が発案し，歓迎のダンスを踊るために結成したのがきっかけである。その後，地域の婦人会で要職についている地元女性, M-20 からの声かけがあり, 十五夜（旧盆）や敬老会の行事, さらに宮古の人びとにとって芸能を披露する晴れの大舞台ともいうべきマティダ市民劇場での芸能祭にも出場してきた。また，2013 年には台風 30 号に襲われたフィリピンの被災地を支援するチャリティーショーで成功をおさめている。石垣には存在しないタイプのグループである。

4）興行の元同僚★

興行の元同僚★は，石垣島のそれと同様に，同じプロダクションに所属し，生活を共にしたフィリピン人女性たちである。

5）現在の同僚★

現在の同僚は, 石垣フィリピン・ネットワークにはない集まりである。これは, 複数のフィリピン人女性たちが働く職場，とくに介護施設における同僚の関係で，フィリピン人女性たちはここで定期的に顔を合わせ，フィリピンの言葉でしゃべり，仕事のシフトなどを融通し合う。ニューカマーであるベトナム人女性たちとの間には, 言葉や文化の相違があり, それほど親しい交わりはないのだが，中には職場の先輩として，孤立しがちなベトナム人女性に助言を与える年配のフィリピン人女性もいる。

6）A 島の近隣・親戚関係★

宮古島と橋でつながっている A 島は，周囲 9 キロの島に 6 人のフィリピン人女性が暮ら

名称未設定-1　18　　2016/05/11　1:02:33

しており，結婚の仲介でつながっていたり，夫の係累を通じて親戚関係になっていたりする人も多い（本誌高畑論文を参照）。フィリピン人女性どうし，子どもどうしは，きわめて親密な関係を結んでいる。

3. 宮古フィリピン・ネットワークの構造的特徴

宮古フィリピン・ネットワークは，石垣島のそれと比べて，インフォーマル・グループに比重のかかった構造になっている。その集いは，親密性に大きく依拠している。親密性は，相互扶助を支える資源ではあるが，親密性に依存したネットワーク構造には，人間関係の不和がネットワーク全体にダメージを及ぼすなどの不安定性が伴う。

宮古では，カトリック教会内部におけるフィリピン人女性たちと地元信者との融和や協働は，石垣に比べて低いレベルにとどまっている。また，宮古には石垣のような教会隣接のカトリック系の学校がなく，その保護者と教員の関係も存在しない。地元信者たちは，フィリピン人信者たちが教会に来ていることは知っている。

一方で，教会の外，宮古の地域社会におけるフィリピン人女性たちは，石垣に比べて可視的である。それは，マブハイ・ダンスグループの活動によるところが大きい。

宮古では，地域のコミュニティの中に，フィリピン人女性たちの「巻き込み」をはかる女性，M-20 がいた。M-20 は地域の婦人会で要職に就いており，定年前は公立学校の教員を務め，管理職の経験もある。フィリピンルーツの子たちの比率が大きいＡ島の学校にも赴任し，そこでフィリピン人の母親らと知り合った。定年後に婦人会の要職に就いたとき，婦人会活動に参加してくれそうな，明朗で活動的な女性たちとして，フィリピン人女性のことが想起されたのである。

フィリピン人女性たちは，M-20 からの「巻き込み」によく応え，活動の場を広げていった。ただし，ダンスの披露という活動内容は，地域における可視性を高めても，そこから地域住民との協働などの相互行為が発展する契機にはなりにくい。いくらかのフィリピン人女性たちは，地域の婦人会活動に参加しているが，そこでエスニシティがほぼ不可視であることは，石垣島と共通している。

もうひとつの宮古ネットワークの特徴は，Ａ島における濃密な関係性を含んでいることである。Ａ島では，フィリピン人女性どうしだけではなく，地元住民とも相互行為がある。島民全員参加の伝統行事では，フィリピン人女性たちは芸能パレードでフィリピンの舞踊を披露することがある。

さらに，島の伝統的な信仰共同体の中核ともいうべき「神役」[3)] の家の息子たちに嫁いだのも，フィリピン人女性たちであった。彼女たちは，個人としてはカトリックを信仰し，教会模合やロザリオに参加しながら，この特別な家の嫁としては，姑が祈りに赴くときに

名称未設定-1　19　　2016/05/11　1:02:33

同行して手伝いをし，島の人びとと共に祈るのである。

石垣フィリピン・ネットワークとの比較において浮かび上がる宮古の特徴をまとめると，インフォーマル・グループに偏った構造，カトリック教会内における地元信者との融和や協働の低さ，地域社会における可視性の相対的な高さ，そして小さな離島の濃密かつユニークな関係性を含んでいることだといえる。

4. 宮古フィリピン・リーダーシップの構造

宮古にも，石垣と同様，二人のフィリピン人女性リーダーがいる。

M-5 は 1962 年に生まれ，フィリピンで大学院を卒業後，いくつかの職を経て私立小学校の校長を務めた。宮古に先住していた M-7 の紹介で，2002 年に結婚のため来島した。M-5 は，舅に支えられて日本語と農業を覚え，仕事の傍ら，地域で英会話の教師をした。M-20 の勧めで「婦人の主張」コンクールに出場し，フィリピンから宮古に嫁いだ経験を語って宮古島優勝，沖縄本島でも入賞した。マブハイ・ダンスグループの創立者であり，小学生の娘も参加して一緒に踊っている。教会模合では，会計を担当している。地域の婦人会に参加し，婦人会長も務めたことがある。仕事は，夫とともに農業をしている。フィリピンで専門職に就いていたので，宮古島に結婚移住するにあたっては，家族や友人が驚いて反対したという。本人も迷う気持ちがあったが，舅が自らフィリピンまで説得に来てくれたことをありがたく思い，新しい人生を切り拓こうと思って来住した。新しいことに挑戦する意欲が高く，その積極的な行動は，宮古のフィリピン人女性たちの可視性を高めてきた。

M-5 が属している集いは，1）教会模合＊，2）ロザリオ，3）マブハイ・ダンスグループ（＊）である。マブハイ・ダンスグループの創立当初は，練習場所として自宅を開放し，フィリピンで買ってきたＤＶＤをもとに振付を考案し，すべてを仕切っていた。その後，興行経験のある女性たちが主なメンバーになってきたためにその役割から退き，ダンスグループのリーダーも他の女性に譲ったという。

M-6 は 1975 年生まれで，フィリピンでは大学に通ったことがある。仕事でフィリピンにたびたび来ていた宮古島の男性と知り合って結婚し，2002 年に来島した。長男は関西圏で専門学校に通い，次男は中学生である。教会でフィリピン信者のリーダーとして位置づけられており，可能な限りミサに出席している。2013 年にフィリピンを台風 30 号が襲った時には，実家の屋根が吹き飛ばされたという。M-6 は，宮古島でのフィリピン人女性たちによるチャリティ公演において，要となって活躍した。

M-6 は，1）教会模合，2）ロザリオ（＊），3）マブハイ・ダンスグループ，5）現在の同僚＊に属している。ロザリオについては発案者で，当初は時間と場所の調整などを行っ

名称未設定-1　20　　2016/05/11　1:02:33

ていた。一方で, 2014年夏の調査時は, リーダーを交代制にしていこうとする過渡期であり, M-6は，教会・信仰関係のリーダーを別の女性に交代しつつあった。

リーダー交代の背景には，同じ人が継続することの負担がある。さらに，親密性に依存するネットワークにおいて特定の人がリーダーを続けると，その人との個人的な関係の疎密によって疎外感や不満が出てくるため，持ち回りになったようである。

そして宮古にも，石垣と同様に，二人のリーダーには及ばない領域をカバーするもう一人の女性がいる。その人は，Ａ島在住のM-1である。

M-1は1967年に生まれ，フィリピンで大学を卒業した。1993年に興行で宮古に来島し, 夫となる男性と知り合い, 翌1994年に結婚してＡ島へ移住してきた。夫は農業をしており, しばらくそれを手伝ったが，現在はM-6と同じ介護施設でパート勤めをしている。二人の娘は沖縄本島で大学生である。Ａ島の「神役」の次男嫁でもある。

M-1は，実はM-5，M-6よりも広く，宮古フィリピン･ネットワークに関わっている。1）教会模合，2）ロザリオ，3）マブハイ・ダンスグループ，4）興行の元同僚，5）現在の同僚，そして6）Ａ島の近隣・親戚関係までのすべてをカバーしているのである。

M-1は，リーダーシップをとることはないが，ほとんどの集いに参加し，どのフィリピン人女性ともなんらかの接点がある。Ａ島に来て10年以上が経過しており，古参のフィリピン人女性のひとりである。

宮古においても，石垣と同様に，二人のリーダーは相対的に高学歴で，経済的にも安定層に属している。M-5が教会模合を支え，M-6は教会のミサに出席するなどの役割分担もなされている。ただし二人とも結婚移民で，興行経験がない。それも含め，すべての集いに関わるM-1がネットワークを下支えしているように思われる。

Ⅳ．次世代継承 ―― リーダーの子どもたちを中心に

1．M-6とM-17親子の事例

宮古におけるリーダーの一人, M-6には, フィリピン生まれの19歳になる長男M-17と, 地元の公立中学校に通う次男がいる。M-17は，関西圏の専門学校で通訳になるための学科に通っており，英語とビサヤ語を話すことができる。進学のために離家する前，家庭で母子がビサヤ語で会話していると，父親が嫌がったという（語り①)。M-6は子どもに, 教育の大切さ，学業をやり遂げることの重要性を伝えてきた（語り②)。

M-17は, 幼少期から複数回, フィリピンと宮古島を往還した。宮古でもフィリピンでも, 周囲との子どもとのトラブル,「ケンカ」が，往還の契機になった（語り⑤，⑥)。M-17は，理由不明のまま「戻された」という意識で移動する（語り⑥，⑦)。二度目の宮古では, 一対一の日本語指導で非常にきつい思いをした(語り⑦)。母親のM-6による認識とは,

名称未設定-1　21　　2016/05/11　1:02:33

落差がある（語り③）。

宮古での高校時代には，「アホ」の限りを尽くした（語り⑧）。一方で，海洋実習でパラオに行くと，自由時間には友達の通訳をした（語り⑨）。英語スピーチコンテストに入賞したこともある。

進路として通訳になるための専門学校を選んだのは，船舶関係の仕事を志望したためであるが，英語の勉強なら「楽ができる」という見込みもあった。実際にはアルバイトが生活の中心となり，授業には欠席しがちになった。一方で，点数では日本人の学生に負けても，海外に行けば自分の方が実力は上という認識がある（語り⑩）。

2. M-1 と M-15 親子の事例

Ａ島在住の M-1 は，フィリピンで生まれ育った実家が教育熱心で，きょうだいの全員が大学または専門学校に通い，教師になっている。M-1 自身も，「学校に行く人と行かない人は全然違う」と考えている。娘は沖縄本島で大学に，息子は地元で高校に通っている（語り⑪）。

子どもには，がんばって勉強していい仕事に就くことが財産になると伝えてきた。そこには，子どもが「フィリピンのハーフ」であることも関連している。結婚に先立って，相手の親から学歴や職業を聞かれたら胸をはって答えられるようになっていてほしいという願いがあり，「ハーフ」であることよりも学歴や職業が大事なポイントになるように，そこをがんばらせたいという思いがある（語り⑪）。

娘と息子は，どちらも英語スピーチコンテストで入賞したことがある。娘には英語を教えたことがあるが，学校の先生とフィリピンの英語のイントネーションが異なり，娘が発音を直されたことがきっかけで，学校に任せるようになった。ビサヤ語の継承はしていない（語り⑫）。

長女である M-15 は，Ａ島で生まれ育った。たった 15 人しかいない小学生の全校生徒のうち 2 人がフィリピンルーツの子どもで，1 学年に生徒がひとりきりだった時期もあった。学校や地域におけるフィリピン人の可視性の高さ，そして教師との濃厚な相互行為に影響を受けて，M-15 は小学校 2 年生のときから「フィリピンネタ」の作文を書き，入賞してきた（語り⑬，資料１）。

大学受験では，母親とフィリピンに行った経験とアジアへの県費研修の経験をアピールし，AO 入試で合格している（語り⑭）。そこでは外国，とくに開発途上国への関心を語ったが，そのような関心は，小学校から高校にいたるまでの，「フィリピンネタ」を引き出してくれる先生たちからも影響を受けてきた（語り⑬）。

宮古島の高校に進学した後も，教師は M-15 のルーツや関心をよく把握し，それを引き

名称未設定-1　22　　2016/05/11　1:02:33

出すような進路指導をしている（語り⑭）。さらに M-15 以外に 2 名，宮古出身のフィリピン第二世代の大学生がいるのだが，全員が AO 入試で合格しており，フィリピンルーツをアピールするように高校の教師に勧められている。フィリピン第二世代の生徒たちに対する進路指導として，ひとつの戦略が定型化していることが考えられる。その背景として，宮古のフィリピン人女性たちが，地域においてある程度，可視的であることが影響しているかもしれない。

M-15 は沖縄本島の大学に進学した後，友人にはフィリピンルーツのことをすすんで話すが，教師とのやりとりや勉強の中に「フィリピンネタ」を活かす回路はなくなった（語り⑭）。アルバイト中心の生活になり，英語の勉強に打ち込んだりアジアや途上国に関係する活動を始めたりすることはなく，そのことに対する焦りもある（語り⑭）。自分には英語力が足りないことを感じている（語り⑮）。母親の M-1 も，娘の英語力については同じ認識をしている（語り⑫）。

一方で M-15 には，英語によるコミュニケーションが「テンション」でなんとかなった記憶もある（語り⑮）。英語の勉強をすれば現場でのコミュニケーション力が増すという実感が薄いことについては，M-15 は，M-17 と共通している。

Ⅴ．結びに代えて ― 島嶼におけるフィリピン・ネットワークと次世代継承

1．石垣と宮古におけるフィリピン・ネットワーク

石垣と宮古におけるフィリピン人女性たちのネットワークを比較することで，それぞれの特徴が明らかになった。石垣の特徴は，フォーマル・グループとインフォーマル・グループの均衡がよいこと，カトリック教会内の地元信者との融和や協働が進んでいることである。一方で宮古では，地域社会における可視性が石垣島よりも高く，それが舞踊という，フィリピン人にも宮古の人びとにも親しみ深い回路を通じて展開されてきた点が興味深い。ただ，宮古にはインフォーマル・グループへの偏りや，親密性への依存による不安定性があり，教会内の融和や協働に課題が残されている。

石垣と宮古におけるフィリピン・ネットワークとリーダーシップを「島嶼」という視点からとらえ直すと，都市や農村とは異なる特徴が浮かび上がる。都市圏との大きな違いとして，島嶼に定住するフィリピン人女性たちは，世代や来島経緯，仕事などの面で相対的に均質性が高く，新たなフィリピン人の流入もほとんどなく，限られた数の似通った当事者どうしが狭い島の空間の中で，親しみやつながりをもちやすいことが挙げられる。ただし，当事者間の親睦や相互扶助は，島嶼の空間的な特性を背景とし，カトリック信仰を結節点としながらも，けっして自然発生的に生じてきたわけではなかった。石垣島ではフィリピンルーツの，宮古ではフィリピン人のシスターがフィリピン信者の組織化を開始し，

名称未設定-1　23　　2016/05/11　1:02:33

地元の女性たちがフィリピン人女性の「巻き込み」をはかり，リーダーはそれによく応えて，地域社会との相互行為に根ざしつつ，能動的なアクターとしてのポジショナリティを獲得していったのである。

農村と比較すると，石垣と宮古のケースにおいては，行政や業者による仲介婚がなく，仲介婚の弊害のひとつである当事者間の競争意識が生じにくい。

ただ，島嶼にも結婚移民に共通する問題状況，とくに「農村花嫁」について指摘されてきた抑圧や孤立は存在する。インタビューの中でも，教会に通うことや家庭でフィリピンの言葉を話すことを夫やその両親からとがめられた経験を語る人がいた。また，かつて近隣に住んでいたフィリピン人女性の転居先を聞くと，「内緒」という答えが返ってくることがあった。これは，深刻な DV に遭った女性が沖縄県外へ逃れたことを含意していると思われる。一方で，石垣と宮古のケースでは，農村の結婚移民にしばしば見られるような同化，エスニシティを「隠す」戦略（仲野 1998）は見いだせない。狭い島の中ではそもそも「隠す」戦略は成り立ちにくいのだが，教会に来ることができない女性のためにはロザリオがあり，相互扶助を献身的に支えるシスターやリーダーがいることの意味も大きい。島嶼型フィリピン・ネットワークは，当事者を孤立から守るセーフティーネットの機能を果たしている。

もうひとつの「島嶼」の都市圏との相違は，専門的な問題解決の機構が乏しいことである。島嶼性は，空間的な閉鎖性だけでなく社会関係資本の限定性をも含意する。石垣と宮古には，国際交流のサークルはあるが，外国人住民を支援する市民活動は存在しない。島嶼には，NPO，ボランティア，共生のまちづくり活動などの支援の文脈，専門家や活動家はあまり存在しない[4)]。しかしそれゆえに，支援の枠組みに回収されない当事者間，さらに地域と当事者の相互行為の豊かな展開が見いだされる。それは，相互扶助と専門家の支援が併存する都市集住型とも，3.11 以後に急激に外部の支援者が流入してきた農村散住型とも異なる，当事者の主体性や日常のリアリティに根ざしたネットワークとして，ある意味では先駆性を有しているように思われる。

2. 島嶼と次世代継承

一方で，島嶼型フィリピン・ネットワークのすぐれた機能は，高校を卒業し，家と島を離れた第二世代の若者たちには十分に及んでいないことが明らかになった。

石垣と宮古の第二世代のほとんどは幼児洗礼を受け，たいてい小学生までは母親に伴われてミサやロザリオにやってくるが，部活動などで子ども自身の社会関係が広がると，教会に来る機会は減っていく（語り④）。家と島を離れた第二世代の若者たちのうち，居住地で教会やフィリピン人の集いに通っている人は皆無であった。言語，とくにタガログ語

名称未設定-1　24　　2016/05/11　1:02:33

やビサヤ語の継承は，そもそも家庭において試みられていなかったり，途中で断念されていたりすることが多かった。

母親は，学業の大切さを子どもに言い聞かせており，第二世代の若者たちにも進学意欲は高く，実際に大学や専門学校に合格するのだが，フィリピンルーツを資源化したり，長期的なキャリア展望に結びつけたりすることは容易ではない。M-17 にとって，フィリピンとの往還経験のために英語が「残っている」ことは有利であっても，往還経験そのものは本人の意思を度外視したものであり，総体としてネガティブな影響を及ぼしている。離島の小規模校で教師から巧みに「フィリピンネタ」を引き出してもらえた M-15 は，それを自覚的に戦略化しつつも，やはり資源化しきれていない。この二人に共通するのは，フィリピン第二世代における，中途半端なアドバンテージがあるがゆえの行き詰まり感である。なまじ現場なら意思が通じるという自負があるために，英語の勉強が自分の力になるという実感が薄い。フィリピン第二世代は，島で育つ間は島嶼型ネットワークの恩恵を享受しても，家と島を離れた後は，その効果は及んでいない。

しかし，第二世代においてフィリピンルーツが資源化されない状況は果たして「問題」なのかという疑問も成り立ちうる。フィリピンの言葉の継承を願い，実際に子どもに話しかけてきた母親は，宮古にただひとりだけだった。ほとんどの母親は，フィリピン文化の継承を子どもに期待していない。そして若者自身もそれをすすんで行っていないとき，「フィリピンに関連する仕事に就きたいと思わない？」「他の日本人の子に比べれば英語は得意でしょう？」といった問いを重ねる調査者の側の，次世代継承をめぐる自明の前提や価値観もまた問われるべきであろう。

M-17 の語りは，口癖であるかのように「ほんと，そんな感じです」という言葉で締めくくられている。それは自己疎外の感覚をうかがわせるものであるが，同時に，調査者が成立させようと試みる「フィリピンに関して盛り上がる会話」というものを徹底的に遮断する防壁ともなっている。すべての問いに間髪を入れずに答え，饒舌でさえある語りに一貫しているのは，「フィリピンルーツは単なる現実であって展望でも可能性でもない」「こんな話にオチはない」という，言明されることはなかったメッセージである。フィリピンに関してまったく話が盛り上がらなかったこのインタビューは，逆説的に，第二世代の文化継承についてすぐれて示唆的である。

本稿で扱った事例は，成人に向けてライフステージが大きく変動しつつある過渡期であり，描いている状況は限定的である。一方で，島嶼型フィリピン・ネットワークというものを仮説的に索出していく作業においては，第二世代に対する効果の及ばなさに言及しておくことは重要であると思われる。

効果が第二世代に及ばないのは，島嶼型フィリピン・ネットワークが，基本的に島とい

名称未設定-1　25　　2016/05/11　1:02:33

う空間の中で機能するためであろう。さらに，それは移民であるフィリピン人女性のためのものであり，第二世代を射程に含んでいないということもいえるだろう。家と島を離れたフィリピン第二世代が，今後，どのような彼ら自身の移動とネットワーク化をはかっていくのか，そこでフィリピンルーツはどのような意味をもち，あるいはもたないのかということについては，それを問う研究者の立ち位置を含めて，稿を改めて考察したい。

【トランスクリプトより抜粋 ― 子育てと次世代継承に関する語り】（下線筆者）

●M-6

○ 家庭言語をめぐる葛藤（語り①）

― 子どもさんに，フィリピンの言葉を教えたり，フィリピンの何かを教えたり

「あー方言（注：ビサヤ語のこと）よね。長男だけまだ残ってるからできるけど。」

― あっちでしゃべってたのが残ってるのね。

「そう，まだ喋れるよ。」

― 次男には全然教えてない？

「理解できるけど喋れない。」

― はー，それはどうやって理解できるようになった？

「どうだろうね？普通に聞いてるから（長男と母親の会話を）」

― お父さんがいる前でも（長男と）ビサヤ語でしゃべる？

「そう。でもお父さんが嫌だ。」

○ 子どもに教えてきたこと ― 教育の重要性（語り②）

「最後まで卒業するのが大事。Education が大事だと思う。長男も（専門学校は）2 年間だけだけど，あっという間に終わるから，頑張らないといけないよって。（勉強する内容は）何でもいいんだけど，卒業しなさいと。」

○ 長男の言語習得は「すぐできた」という認識（語り③）

―M-17 は 6 歳でここへ来て，すぐ学校ですよね。

「あー，M-17 はね，日本語がまだわからないから，ダメだった。でも子どもだから，若いからすぐできたんだよね。一生懸命，先生なんかが，CD とか持たせて。」

○ 子どもが教会について来るのは小学生まで（語り④）

― 何歳ごろまでおとなしく（教会に）ついて来ました？お母さんが行こうって言ったら

名称未設定-1　26　　2016/05/11　1:02:33

一緒に行ったのは，中学生ぐらいまで？

「高，中 … そうだね，次男も中学生だけどなかなか，もう。」

●M-17

○ フィリピンと往還した経緯（語り⑤）

「6 歳で（フィリピンから宮古島に）来て，で，戻されたんですよ。なんかいろいろやっちゃってて。小学校上がった頃に校長室，めっちゃ呼び出されたりとかして。で，フィリピンに帰って，小学校 4 年生の時に（宮古島に）戻ってきたんですよ。」

― 何したの，小 1 のとき。

「言葉が通じなかったからケンカしたのかな，多分そんな感じですね。」

― 初めて日本に来て，その時は全然日本語はわからなかったんですか。

「わからなかったです。本当に。」

― お母さんに教えてもらったりして。

「そんな感じですね。お父さんとか。大体，幼稚園の頃にできた友達が教えに来たりはしてましたね。幼稚園に来て，日本語わかってたんですけど，（フィリピンに戻されて）記憶がなくなるっていう。日本語の。」

― 日本語，忘れちゃった。

「忘れましたね。」

― また 4 年生で（宮古島に）帰って来た時も，…

「一から。何かもう，俺，多分日本には戻れないだろうなと思って，もう忘れてた。」

○ フィリピンでもトラブルが起こる（語り⑥）

― 教会，通ってた？

「行きますよ，普通に。」

― 学校は，元の学校に戻って，…

「あぁ，はい。みんなにお帰りみたいに言われたんですけど，俺からしたら，あぁ，久しぶり，みたいな。1 年ぶり，なんで戻ってきたの，わからんみたいな感じでした。」

― みんな歓迎してくれて楽しい？

「楽しかったですね。したら，知らない人がいたんですよ。誰，お前みたいな感じで。その人がけっこうやんちゃで，ウザかったんですよ。（その人とトラブって）いろいろ，問題起こしましたね。俺だけが呼ばれたりしましたね。」

― 怒られるの？

「いや，俺，無視してました。どこまで問題児かわかんないっすね（笑）。」

名称未設定-1　27　　2016/05/11　1:02:33

― なんでその，今はこんなにいい青年なのに，行く場所，行く場所で会う人，会う人とケンカ（笑）。

「わかんないんすよ。気がついたらなんか。」

○ また宮古島へ，日本語再習得の困難（語り⑦）

― さしつかえなかったら，なぜ４年生でまた宮古島に行くことになったか教えてもらえますか。

「わかんないっす俺。俺が，行きたいなって言ったら，じゃぁおいでってなって。え，いいの，みたいな感じで。」

― ああ，そうやって。ふーん。

「来たんですけど，来た瞬間，（言葉が）何もわからねぇよっていう。」

― 完全に忘れてまた一からって大変じゃなかったですか。

「あ，大変でしたよ。けどやっぱ思い出してましたよ。これはこれだみたいな感じで。」

― なんか特別に，外国から来た子どものために日本語を教えてくれるとか。

「やられました。やりましたね。俺，泣きながらやりましたね。」

― 泣いてたんだ！

「泣きましたね。もうなんで俺だけってなって。たった一人ですよ。一対一の授業で。1年間くらいだったかな。この授業，お前ひとり。うわ，もうきついわ。」

― あぁ。

「もうケンカとか，先生と，まぁしましたね。めんどくさいみたいな，投げ出すやつ。」

○ 高校時代の「アホ」の思い出（語り⑧）

「もうアホのことしかやらんかったですね。お母さんには大丈夫ってメールして，お父さんは（長期出張で）いなくて，自由みたいな。お母さんもフィリピンの仲間と，踊りの練習とかカラオケ行って，弟はついて行ったんで，暇っすね自分は。俺もイエーイみたいな感じ。やばいですよ。卒業できるのかって思いましたもん。」

― 学校の授業で先生にフィリピンのこと話してくれとか言われたことないですか。

「ないですね。」

― もし頼まれたら。

「もう全然，うん，友達と話すけど，特にオチないよみたいな感じですね。」

― ははは，オチ

「俺，だって子どもの時いたし，今はわからないし，もう。」

名称未設定-1　28　　2016/05/11　1:02:33

○ 海洋実習でパラオに行く（語り⑨）

「40 日間，船で。結構しんどいですよ。勉強っていうよりかもう仕事でしたね。実習だから。」

― そのパラオの人と話したり …

「話しましたね。自分，バス借りたんですよ。観光する日に。自分がずっと通訳で。」

― ああ，すごい。

「はい。」

― 友達が言いたいことも全部，通訳して。

「全部通訳しましたね。」

○ 英語と将来展望（語り⑩）

― 今，勉強しているのは，英語の通訳。

「通訳ですね。もうだいぶサボってるからわからなくなってるけど。」

―2 年間ですか。

「今，俺，2 年なんですけど。多分俺，できるかな …」

― バイトが忙しくて行けないとか。

「忙しいっていうか，まぁ，さぼってるってるのもあるし。そんな感じです，ほんとに。」

― 周りの純粋日本人の子に比べたら，あなたすごい英語，アドバンテージあるんでしょ。

「ん～，勉強してる人ではまだわかんないっす。してる人はいますよ，やっぱり勉強。」

― じゃあ貯金はあるけどまじめにやってる日本人にはもしかしたら負けるかも。

「負けるかもしれないですね。負けるけど，いざ海外行ったら，多分，慣れてない人は勉強したところでなんもできないっすね。」

― あぁ。

「喋れたところで聞けないし。ネイティブのスピーカーたちの。」

― じゃぁ点数はいまいち取れなくても，海外行ったら勝てるなという感じ。

「まぁそうですね。それはもう確実。」

― 学科で通訳って思ったのはなぜ？

「え，ただ単に，あ，楽しそう。あと，楽したいな，みたいな。」

― 楽。

「英語できる時点で，結構楽じゃないっすか。」

― 得意なことを活かして。

「あぁ，活かして。そんな感じです。」

― 今は何をやってる時間が一番楽しいですか。

名称未設定-1　29　　2016/05/11　1:02:33

「俺ですか。寝てる時間。」

— 将来，フィリピンで仕事したいなとか。

「ないですね。」

— フィリピンに関連する仕事したいなとかも。

「全くないですね。わかんないですけど，まだ夢，決まってないし。とりあえず今，どうやって明日生きるかなって感じです，ほんとに。それしか考えてないです。」

●M-1

○ 教育の重要性を子どもに伝える（語り⑪）

— きょうだい全員がカレッジに行っているの？

「そう。お姉ちゃん，私と妹はカレッジ出て，長男と次男は専門学校。3 名が高校の先生，妹が小学校の先生。」

— きょうだいみんな先生なのね。それは親御さんが必ずカレッジ …

「フィリピンはもし学校行かないとレベルが全然違う。学校行く人と行かない人は全然違う。」

— 自分の子どもさんには，これが大事だよという value(価値観) は何を伝えましたか。

「うちは財産がないから，ちゃんと頑張らないと。卒業したらいい仕事につかせて，それが財産。」

— なるほどね。その value は子どもの時に親御さんから聞いたことなのね。

「そうそう。でも今の時代と前の時代は全然違うね。だから娘，たまに反抗する。また，こんなの教えるさ。うちの娘なんか，ハーフさ。フィリピンのハーフ。その血が流れているから，なんか，なるかもしれないさ。」

— なるかもしれないって，何に？

「もし結婚する場合に，彼の親が，「あんた何，卒業したの？」「何の仕事やってるの」って聞くかもしれないね。」

— ちゃんと勉強しておきなさいってことね。それはとくにフィリピンのハーフだからっていうのもある？

「そうそう。もし結婚するんだったら。何卒業したの，何の仕事してるの，これが（大事なポイントになるように）。」

○ 娘に英語を教える — イントネーションの違い（語り⑫）

— 娘さんが一年生になったら，宿題もって帰ってくるね？

「そう宿題。これママ，どんな？そう，英語だったら … でも娘が自分でわかるから，マ

名称未設定-1　30　　2016/05/11　1:02:34

マが外人だから，自分で頑張ってる。」

― えらい。

「そう，本当に自分で，ただ英語だけは」

― 聞いてくる？

「英語は，まあまあ教える。それで大会とか，娘が好きで出るから。よく優勝なるから，娘。低学年が宮古代表。中学の 2 年に沖縄本島まで出た。高校でまた宮古代表で，那覇の県大会出て福岡まで行った。I was surprised.　私，度胸ない。自分の娘が（笑）。」

― すごいね。たとえば娘さんがスピーチコンテストに出るときは，教えた？

「それ一回，教えたね。でもやっぱり先生がやるからね，フィリピンの英語とイントネーションが違うね。それで先生，またこれじゃないって。英語の先生，オーストラリアからの先生。で，向こうに（お任せした）。」

―M-1 は英語，得意なんだね。

「ううん，M-15 には英語，簡単じゃない。」

― お家でフィリピンの言葉は。

「ビサヤ語はやらん。」

●M-15

○ A小学校時代から「フィリピンネタ」で作文（語り⑬）

― あのね，宮古島の図書館に行ったら，学校だよりの本があったんですよ。そしたら，あなたが小学校 2 年生の時に書いた作文が載ってて。覚えてます？

「は，すっご，何，こいつ（自分の作文，資料 1 を見て笑う）」

― こんなの書いたかなっていう記憶は。

「私，なんか作文書かされたらとりあえずフィリピン書く。とりあえず英語です。で，そのたびに，そういうことについてめっちゃ考えるだけです。だって他のお母さんは日本人だけど私のお母さんはフィリピン人じゃないですか。もってこいじゃないですかネタからしたら。」

― ネタとしてもってこいって言ってるのは，A小中の先生がこういうの書いたり喋ったりしたら，ウケてくれる？

「なんか先生もそういう話をしたほうが人を惹きやすいってわかってたんじゃないんですか。それにうまいこと私も洗脳されて，こういうときからこういうことを書くから，もう将来は，なんか，やっぱり外国か何か，英語喋りたいなとかそういう意識が強かった。」

名称未設定-1　31　　2016/05/11　1:02:34

○AO 入試 ― フィリピンルーツを活かす（語り⑭）

「大学は，先生とも深くしゃべるわけじゃないから，担任っていうのがいるわけじゃないから，私がどういうやつかっていうことを把握されているわけじゃないじゃないですか。でも高校は，私がこういう発言をしたら，先生は，こいつ外国に興味があるんだとか，こいつはお母さんフィリピンだからそういう刺激があるんだろうなっていうのをわかってくれて，先生も私に言ってくるんだと思うんですよ。で私がそれに食いつけば，うまいことサポートしてくれる。でも大学は全部自由だから，自分がやりたいっていう強い意志がないと絶対うまくいかない。私，多少，強制されないとできないんで。… 中略 … とりあえず 4 年間を無駄にしたくないっていうのはあるから，なにかしら自分の中でアクションを起こしたいなと思ってるんですけど。で，別にやろうと思えばいろんなことがそろってる環境ではあると思うんですけど，まだ踏み出せてないのが現状です。なんかめっちゃ焦る … 自由じゃないですか，大学。全部自己責任で，ここにいざ来てみて，そこまで英語に熱中してるわけでもないんですよ今。だからやばいなって感じです。」

― なんでそんなに，いまひとつ熱中 …

「なんでですかね。なんでだと思います？」

― 授業がいまひとつ面白くないとか。

「別に面白くないってわけじゃないですけど，なんでですかね。バイトしてるなって感じ。働いてるのも別に悪くないって自分で思う。多分，勉強って好きじゃないんで。だからわからないです。バイトめっちゃ楽しいですよ。たかがバイトなのに，なんか社会に出るってそういうことなんだよみたいな教え方なんで。大学で勉強してるより，しかも接客業って実力社会じゃないですか。その方がめっちゃ刺激的です，今は。」

○ 英語は得意ではない／テンションでいける（語り⑮）

「とりあえずは英語の勉強をしないといけないなぁと。自分の語学力に不足があるなっていうのはすごく感じて。なんか通じ合いたいけど言葉が足りないから，あと情報が，自分自身の情報が足りないから，もっとわかるべきところまでたどり着けない。」

― でも，ごめんなさいね，なんか，あなたのこと事前に調べてるわけじゃないんだけど，英語はだいぶ得意だって話を …

「得意じゃないですよ。得意じゃないです。」

― ふーん，そうなんだ。いや，お母さんがフィリピンの方で，フィリピンの人は英語もできるから …

「そういうイメージ，めっちゃもたれるんですけど，そうでもなくて。そうですね。お

名称未設定-1　32　　2016/05/11　1:02:34

母さんはもう自分が生まれた時からずっと日本で，コミュニケーションはずっと日本語だったし。なんか普通に，勉強の中では英語は好きっていう気持ちはあるんですけど，外国の方と会った時に，話が弾むほどのコミュニケーション力はないです。」

― そうよね，A島で生まれ育ったものね，あなたは。

― じゃあ例えば，お母さんと一緒にフィリピンは，何回くらい行ってます？

「小さい時は何回か行ってるって言ってたんですけど，それからずっと行ってなくて，10 年近くいってなくて，高校 2 年生の冬に。で，高 3 の夏休みにラオスに行ってるんで，なんかどっちも，あ，あ，… って思いました。この，喋れないっていう。時期が近かったってのも多分あると思います。

― でもフィリピンに行くと，おじさんおばさんとかいとことは，どんな風に会話はしてたんですか。

「英語で。英語なんですけど，そこまで英語力なくても勝手に，テンションでいけると思ってるんですよ。こっちが楽しいと思ってればあっちも楽しいから，多分，そこまで必要なかったっていうのか。このラオスも，英語が母国語じゃなくて，ホームステイ行ったら英語も通じない世界だったんで，でもそこでも暮らせたから，別にそこまで … なんていうんですか，喋ろうと思えばどうにかこうにかすればいけるなって勝手に思って。」

― どうなんだろう，こう，自己紹介したときに，フィリピンとのハーフだって言うと，英語喋って，みたいに言われることって結構ある？

「喋れるの？って言われますけど，いや喋れないって。」

― それはやっぱりそういう風になるんだよねーみたいな感じで。

「ハーフあるある，じゃないですかね。」

― だよねー。… 別に嫌じゃないですか？お母さんフィリピンだから何々でしょとかって言われたりとか，英語，喋れるでしょ，とか。

「あまり気にならない。なんにも英語，喋れないやつに言われたら，お前よりは喋れるよーって。」

○ タガログ語を押してこないお母さん（語り⑯）

「小さい時から英語には興味があった。なんか外国っていうものに対しての憧れがちょっとあった。なんか，外に出るって。」

― お家の中では？お母さん

「日本語です。日本語なんですけど，なんかA島でも，フィリピンから移住してきた方たくさんいるので，そういう方がお家に来たときは，もう全然，タガログ語での会話。」

名称未設定-1　33　　2016/05/11　1:02:34

― その会話には，時々，入ったりとかもしますか？

「なんか多分雰囲気と，小さい時から聞いてるっていうのがあるから，なんとなくこういうことを話してるんだろうなみたいな。それでたまにツッコむときとかだけはあるんですけど，もうがっつりタガログ語でお母さんたちの会話に入ることはなかったし。なんかお母さん，そこまでタガログ語，私に押してこなかったし。」

【資料 1　M-15 が小学 2 年生のときに書いた作文】

母の日図画作文コンクール　作文の部　優秀賞

わたしのおかあさんは，フィリピンから，わたしがうまれるまえにきました。宮古にきたときは，うれしかったそうです。

もういまでは，日本語をおぼえて，じょうずにしゃべれます。いっぱいがんばっておぼえたそうです。わたしは，おかあさんはすごいなと思います。日本語もえいごも，タガログ語もしゃべれます。

おかあさんは，このまえ学校にきて本を読んでくれました。それは，えいごの本でした。えいごの本を読んでくれるおかあさんは，とってもかっこよかったです。わたしは，うれしくなしました。こんど，おかあさんにえいごをおしえてもらいます。

わたしは，一年のときフィリピンに行ったことがあります。日本とちがってびっくりしました。ブタもいっぱいいました。ごはんもスープの上にのせて食べます。おかあさんが，「フィリピンのりょうりは，おいしい。」とききました。「うん。おいしいよ。」と言うと，おかあさんはうれしそうです。それと。フィリピンには，たたみがありません。ふしぎにおもっておかあさんにきくと，「国がちがうと，いろんなことがちがうんだよ。」とおしえてくれました。

わたしは，日本にきてがんばっているおかあさんはえらいなあとおもいます。

これからも，おかあさんにいろんなことをいっぱいおしえてもらいます。

おかあさん，いっぱいがいこくのことをおしえてね。えいごもおかあさんみたいに，話せるようになりたいからおしえてね。

注

1）島嶼におけるフィリピン人結婚移民を扱った先行研究として，田島 2000 がある。鹿児島県大島郡をフィールドにした調査研究は，本稿で扱った沖縄の先島地域の事例と同様に，行政・業者仲介婚がなく，興行経験をもつ女性たちが結婚移民してきている状況を描いている。

2）在日フィリピン人については，ネットワークよりもコミュニティという枠組みで，当

名称未設定-1　34　　2016/05/11　1:02:34

事者間の結びつきがとらえられてきた（後藤 1998，高畑 2006・2007）。ここでは，フィリピン人女性たちの集いが複数，併存することに着目し，ひとりひとりが仕事や家庭の事情，人間関係に応じて参加の度合いを按配できる緩やかな集いの総体として，ネットワークという用語を用いている。なお本稿では，居住地とフィリピンにまたがるトランスナショナルなネットワーク，仕送りや SNS を介したコミュニケーションなどは分析の対象としていない。

3）A 島には 9 名の神役がいて，名称や役割が異なる（大城 2003：1088）。この事例がそのうちのいずれの「神役」であるのかは不明である。

4）島嶼に支援者がいないわけではない。石垣と宮古におけるフィリピン人女性にとって最も重要な支援者は，フィリピンルーツ，あるいはフィリピン人のシスターであろう。彼女たちは，カトリック教会の「難民・移住・移動者司牧」の担い手としてフィリピン人信者の支援に取り組んできた。さらに，石垣と宮古の教会が所属する那覇教区内の難民・移住・移動者司牧の担い手にはフィリピン人の女性宣教師がおり，毎年 11 月には沖縄県内から約 300 人が集うフィリピン信徒集会を開催し，クリスマスにはフィリピン人の多い教会を巡回して黙想会とパーティーを開催している。島嶼における教会関係者の支援は，沖縄本島，さらには全国的なカトリック教会の施策と連動している。

文献

後藤美樹 1998「神戸における『フィリピン人コミュニティ』の援助活動」神戸大学大学院国際協力研究科『国際協力論集』5 巻 3 号「阪神淡路大震災特集号」：89–109．神戸大学.

原めぐみ 2011「越境する若者たち，望郷する若者たち — 新日系フィリピン人の生活史からの考察」大阪大学大学院人間科学研究科『グローバル人間学紀要』4 号:5–25. 大阪大学.

嘉本伊都子 2014「結婚移住女性と多文化共生：震災と離婚という視点から」『現代社会研究科論集』，京都女子大学大学院現代社会研究科博士後期課程研究紀要 8 号：1–31. 京都女子大学.

仲野　誠 1998「＜外国人妻＞と地域社会：山形県における＜ムラの国際結婚＞を事例として」『移民研究年報』4 号：92–109．日本移民学会.

大城　學 2003『沖縄の祭祀と民族芸能の研究』弧琉球叢書 6．砂子屋書房

佐竹眞明・メアリー・アンジェリン・ダアノイ 2006『フィリピン — 日本国際結婚 — 移住と多文化共生』めこん.

高畑　幸 2000「バイカルチュラル・アイデンティティの構築に向けて — 日比家庭の第二世代の事例から」『市大社会学』 1 号：24–36. 大阪市立大学.

――― 2003「国際結婚と家族 — 在日フィリピン人による出産と子育ての相互扶助」駒

名称未設定-1　35　　2016/05/11　1:02:34

井洋監修・石井由香編著『移民の居住と生活』講座　グローバル化する日本と移民問題　第Ⅱ期　第 4 巻：256-291．明石書店．

――― 2006「サントニーニョと千羽鶴 ― 広島のフィリピンコミュニティに関する予備的考察」『部落解放研究』13 号：67-82．広島部落解放研究所．

――― 2007「国内外に広がる移民ネットワーク ― 名古屋市フィリピンコミュニティを事例として」『現代社会学』8 号：73-83．広島国際学院大学現代社会学部．

――― (2012)「大都市の繁華街と移民女性 ― 名古屋市中区栄東地区のフィリピンコミュニティは何を変えたか ―」『社会学評論』62 巻 4 号 :504-520．日本社会学会．

武田里子（2006）「新潟県魚沼地域における『外国人花嫁』の存在の歴史的社会的意味の探求 (1)」日本大学大学院総合社会情報研究会紀要 7 号：587-598．日本大学．

田島康弘（2000）「大島郡天城町における日比交流について」『鹿児島大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編』第 51 巻：49-71．鹿児島大学．

（のいり　なおみ・琉球大学法文学部准教授・社会学）

Filipino Women's Living Worlds in Sakishima Islands, Okinawa: Focusing on Network, Leadership and Cultural Inheritance

NOIRI Naomi

University of the Ryukyus

Key words：Filipino women，network，leadership

This manuscript is about women who migrated to Okinawa, Sakishima Islands from Philippine. We will analyze their living by focusing on their network, leadership, and the next generation inheritance. In Ishigaki and Miyako Isaland there is a family worship called “Rozalio” which is based on Catholism, and “Moai” which you reunite and have mutual aid loans, and a network composed by Filipino women who experienced a performance in the same production. The leaders who supports these groups are relatively well-educated, economically stabled in common, and skillfully play the leadership with each other. In this manuscript, we will reveal the structure of Ishigaki and Miyako Island’s network and leadership. Also, by quoting the talks with children and female leaders, we will analyze the challenges over the next generation inheritance of ethnicity, especially the experience of second generation that cannot access the Philippines Roots.

名称未設定-1　36　　2016/05/11　1:02:34